

9 ロック・ミュージカル(1)

ロックとは

ロックンロール Rock'n'Roll の略。アメリカ都市部の黒人音楽(R&B=リズム・アンド・ブルース)を母体として 1950 年代中ごろに確立。「黒人のように歌う白人」エルヴィス・プレスリーの登場によって人種を超えた共有文化となった。音楽的には8ビートや16ビートのような細かく激しいリズム、エレキギターやドラムの大音量、ヴォーカルのシャウトといった特徴を持つ。もともと若者文化を代表とするものであったが、当初はダンス音楽として娯楽性の強いものであったのに対し、1960 年代半ばからはビートルズらの登場によって音楽性が拡がり、当時の社会や政治の状況を反映して、若い世代による「反体制・反秩序」の表現手段として重要な役割を担うようになった。1970 年代以降はロック内部での多様化が進むと同時に「ロック的な音楽語法」は他ジャンルにも浸透し、1990 年代をピークとしてロックの独自性や存在意義は次第に薄れつつある。

ロック・ミュージカル

1950 年代までミュージカルの音楽スタイルの基本はヨーロッパのオペレッタやバラエティ・ショーに由来するもので、内容によってはバーンスタインのようにジャズやラテン音楽の要素がそこに付け加えられた。それに対し、1950 年代半ば以降に台頭してきたロックのスタイルを積極的に用いたミュージカルがロック・ミュージカルである。

最初の代表作は 1967 年の《ヘアー》で、ヴェトナム戦争に反対する若者たちの姿を描く内容とロックのサウンドが直結して成功を収めた。1970 年の《ジーザス・クライスト・スーパースター》は、宗教的題材に対する視点の新しさをロックの「若い」響きが強調し、大きな話題を呼ぶと同時に、ロック・ミュージカルの可能性を広く認識させた。

その後ロックのスタイルはさまざまなミュージカル作品の中に浸透し、とくに「ロック・ミュージカル」と強調されなくてもロック的音楽スタイルが用いられることは一般的になっていく。また、物語仕立てのロック・アルバムが映画化される例(《トミー》など)や、最初は映画として作られのちに舞台化する例(《ロッキー・ホラー・ショー》など)も登場する。

意図的にロックの様式を強調して作られた「ロック・ミュージカル」のその後の代表作としては 1996 年の《レント》が挙げられる。《レント》の内容とロックとの関係としては、主人公の一人ロジャーが自らエレキギターを弾くミュージシャンであるという設定が影響していると考えられる。

これらのほかに、舞台の年代設定がロック全盛の 1950 年代や 1970 年代である場合、またロックそのものがテーマになっている場合には、いわば必然としてミュージカルの音楽にロックが用いられることもしばしばある。《グリース》《ヘアスプレー》《ヘドウィグ・アンド・アグリリーインチ》などがそれにあたる。

ロック・ミュージカルの初期の代表作

ヘアー

脚本および作詞はジェームズ・ラド (James Rado) とジェローム・ラグニ (Gerome Ragni) の二人、作曲はガルト・マクダーモット (Galt MacDermot)。オフ・ブロードウェイ初演は 1967 年、ブロードウェイ初演は 68 年。

徴兵のために田舎から出てきた青年クロードはニューヨークでヒッピーの青年たちと知り合いになり、反戦を主張する彼らからさまざまな影響をうける。ヒッピーのリーダー格バーガーはクロードを恋人と会わせるために一時的にクロードの身代わりになるが、運命のいたずらによってヴェトナムに旅立つことになる。

ジーザス・クライスト・スーパースター

ティム・ライス (Tim Rice) 作詞、アンドリュー・ロイド＝ウェッバー (Andrew Lloyd-Webber) 作曲。1971 年にブロードウェイ初演。聖書を題材にイエス・キリストの最後の 7 日間を描く。ひとりの人間として神や民衆の狭間で苦悩するキリストと、その使徒の一人でありながら「裏切り者」の名を浴びて歴史にその名を刻むことになるユダのふたりに、現代的な視点から新しい解釈を加え、その愛憎に満ちた両者の関係に、マグダラのマリアとの愛情に満ちたもうひとつの関係を絡めて、鮮やかに描き出した作品。